

藤原宮東方官衙地域の調査Ⅱ（第29－3次ほか）

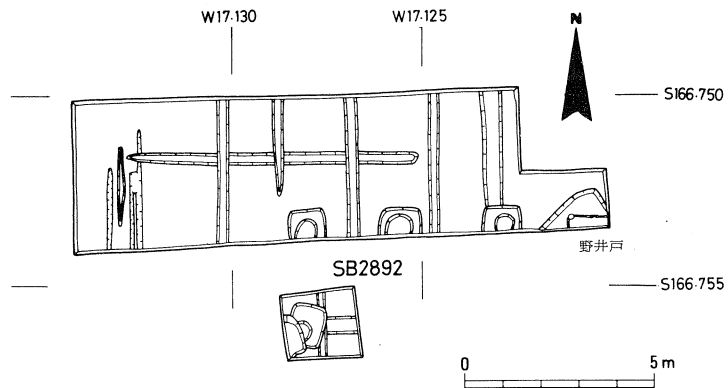
（昭和55年5・8月）

高殿町において、農業用倉庫の建設に伴う一連の事前調査を実施した。藤原宮朝堂院の東方150m付近にあるこれらの調査地には、宮の官衙建物の存在が想定されている。調査件数は6件を数えるが、このうち藤原宮期の遺構を検出した第29－3次、同10次、同11次調査についてその概要を述べる。

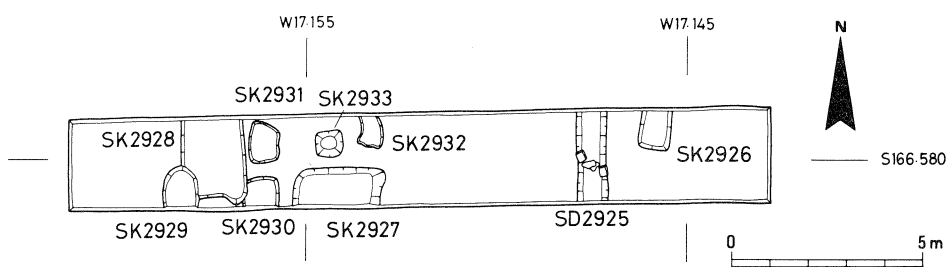
第29－3次調査 調査地は、報恩寺の南西40mの水田で、東一坊大路の宮内延長部にあたるため、東西に長い調査区を2カ所に設けた。調査地の層序は、上から耕土、床土、灰褐色粘質砂土（地山）の順になり、地表下0.4mの地山面で遺構を検出した。調査の結果、大路の痕跡を認めることはできなかったが、東調査区において藤原宮期の建物の一部を明らかにすることができた。

藤原宮期の掘立柱建物SB 2892については、東西2間、南北1間分を確認した。建物の棟方向、規模は不明である。柱掘形の平面形は一辺約1mの方形をなし、深さは0.8mある。柱はいずれも抜取られているが、柱間寸法は約2.7m等間に復原できる。この建物と本調査地の北方35mで検出された掘立柱建物SB 2370（第23－4次調査、概報9）とは、柱間寸法、柱掘形の規模・形状が共通しているので、両者は同一官衙に配置された建物と考えられよう。

第29－10次調査 調査地は、第29－3次調査区北方170mの宅地である。当調査地も東一坊大路の宮内延長推定位置にあたるため、東西18.5m、南北2.5mの調査区を設定した。調査地の層序は、褐色砂質土（客土）、旧水田耕土、同床土、



第29－3次調査遺構配置図（1：200）



第29-10次調査遺構配置図（1：200）

黄褐色土（地山）の順であり、床土と地山の間には、薄い中世の遺物包含層が部分的に認められる。土層の堆積状態は、調査地周辺が中世以前に地山に達する削平をうけたことを示している。

遺構はすべて地表下0.4mの地山上面で検出した。藤原宮期の唯一の遺構であるSD 2925は、東一坊大路の東側溝と考えられる南北溝である。上部を大きく削られており、かろうじて底面近くが遺存する。幅0.8m、深さ0.1mあり、溝底には砂が堆積する。溝内からは少量の土器とともに、砂岩の切石2点が出土した。この溝心の座標をもとに、東一坊大路を5丈幅と想定して朱雀大路までの道路心々距離を算出すると、約269.7mとなり、ほぼ一坊（900尺）に近い数値が得られる。またSD 2925を仮に東側溝とすると、SD 2925以西は宮に先行して造られた東一坊大路の路面となり、その西側溝は調査区外にあることになる。藤原宮期以外の遺構には、古墳時代と中世の土壌がある。古墳時代の土壌SK 2933は、径0.7m、深さ0.8mの規模である。土壌の底からは完形の布留式土器甕2点が出土した。SK 2926～2932は、中世の土壌群である。土壌群の性格は不明であるが、その形態から、浅い皿状の土壌SK 2930～2932と、方形の深い土壌SK 2927～2929の2つのタイプに分かれる。土壌からは13世紀に位置付けられる瓦器碗・土師器皿が出土している。

なお、本調査区の北方約60mの水田で、第29-11次調査を行った。調査の結果、藤原宮期の南北溝SD 2937、柱根の残る小柱穴1などを検出したが、調査区が狭小なため、遺構の性格などを充分明らかにすることができなかった。今後、周辺地域の広範な調査が期待される。